言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

ロザリオの年にあたって

司教　高見　三明

教皇ヨハネ・パウロ二世は、昨年十月十六日、ご自分の在位25年目のはじめに、使徒的書簡『おとめマリアのロザリオ』を発表し、ロザリオについてご自分の体験を交えながらたいへん熱っぽく語っておられます。

序文で、同年十月から今年十月までを「ロザリオの年」と宣言し、第一章でロザリオの意義を説明し、第二章で「光の神秘（これまでは「玄義」と訳されていました）」を提唱して、四つの神秘を解説し、第三章でロザリオを生活に生かす唱え方を述べ、むすびでは、ロザリオを平和のため、また家庭で子供たちと一緒に頻繁に大切に唱えるよう強く勧めております。

以下、その内容を三つの点にまとめてみました。

一、ロザリオの意義を正しく理解し、そのすばらしさを体験しよう

（一）ロザリオは、マリア様と共にキリストを観想する優れた祈りです。マリア様は御子を宿した時からずっと彼を見つめ続け、そのすべてを記憶し思いめぐらしておられました。ロザリオは、このマリア様と同じまなざしでキリストを見つめ、彼女の目を通してその生涯の神秘を今起こることとして黙想するものです。

（二）ロザリオは、わたしたちを神とキリストおよびマリア様と結びつけ、またキリストにおける兄弟姉妹たちと結びつける「鎖」のようなものです。

（三）ロザリオは、マリア様と共に、マリア様によって、御子と御父に向けた懇願でもあります。それは、困難を乗り越え、平和を築く力、家庭を家庭として保つための効果的な助けとなります。

（四）ロザリオは、マリア様を通してキリストを知らせる働きもします。それは、キリストのうちに真の人間の姿を発見させ、キリストの秘義を生きさせてくれるからです。

二、「光の神秘」の提唱

喜び、苦しみ、栄えの三つの神秘は、詩編の数（百五十）に応じて「マリア様の生涯をキリストの神秘と結びつけたもの」ですが、「福音の要約」といえるほど、キリストを中心としています。しかし、「世の光」であるキリストご自身の姿を浮き彫りにするために、公生活の重要な出来事が「光の神秘」として提唱されています。マリア様はどの場面でも「イエスのおっしゃるとおりにしなさい」と言っておられるかのようです。

第一の神秘
イエス、ヨルダンで洗礼を受ける。

第二の神秘
イエス、カナでご自分を現す。

第三の神秘
イエス、神の国の到来を告げ知らせて回心を呼びかける。

第四の神秘
イエス、栄光の姿に変容する。

第五の神秘
イエス、聖体の秘跡を制定する。

「光の神秘」は、できれば喜びの神秘の後に唱えるとよいでしょう。毎日一つの神秘を唱える場合、喜びの神秘を月曜日と土曜日、苦しみの神秘を火曜日と金曜日、栄えの神秘を日曜日と水曜日、光の神秘を木曜日に唱えることが勧められています。

三、「ロザリオの年」の宣言

教皇様は、第二ヴァチカン公会議開会（１９６２年）40周年と教皇レオ十三世のロザリオに関する回勅の発布（１８８３年）百二十周年を記念し、とくに新しい千年紀を「キリストから再出発する」ために、「マリアと共に、マリアに倣って、キリストのみ顔を観想する」必要があると感じ、ロザリオの年を宣言されました。薄れつつあるロザリオに対する熱意を再びかき立て、子どもたちに伝える必要もあります。

「使徒的書簡」とは教皇様が全教会のよりよい善のために強く勧められる内容を盛り込んだ文書ですので、積極的に応えていきましょう。それは、単にロザリオの祈りだけでなく、祈り全般に対するわたしたちの態度を見直して、改めるところは改め、豊かにするところは豊かにして、信仰生活を神の御心にかなった有意義なものにするためです。そのため、今年1月に中央協議会から発行された同書簡をぜひ熟読玩味することをお勧めします。

なお、長崎教区では、5月から10月にかけて教区レベルで取り組むことにしていますが、個人でも家庭でも唱えるように努力しましょう。

A. 確かに似た形をしています。使い方も、ただ手にかけておいたり、合掌してもみ手をしたり、つまぐったりする方法などがあるようです。念仏のような同じことばを唱えてその回数を数える方法は、まさにロザリオそっくりです。その玉の数は一〇八個あるものが普通で、一〇八の煩悩を表しているということです。

「数珠つなぎ」ということばは、犯罪者を何人も一緒につないで護送する場合につかわれたりして、あまり良いイメージは沸いてきませんが、互いに「つながり」合うという思いは大切にしたいものです。

いま地上には、「つなぐ」ことより「切る」ことがまん延しています。新しい世紀は「つなぎ」に向かう時だと思います。

ロザリオと数珠とが宗教・宗派をつなぐきっかけになれば、両者のもつ意義はますます深まることでしょう。

Q. 「ロザリオの年」にあたり、長崎教区では特別の記念行事のようなものを計画しているのでしょうか。

A. もうすでにロザリオの年の中に私たちはいるわけですので、これから準備するというわけにもいきません。そこで教区管理者である高見司教さまは、主任神父さま方に書簡を送り、今年の復活祭までは小教区レベルの行事を行い、5月の聖母月から10月のロザリオの月にかけて教区レベルでの記念行事を進めたい、と提案されました。そして、現在長崎教区が進めている宣教体制づくりを聖母とともにつづけよう、と呼びかけておられます。

Q. ロザリオの祈りは、同じ祈りばかりがつづくので少々退屈な感じもするのですが、何かじょうずな唱え方の秘訣がありますか。

A. くり返される同じ祈りの意味をいちいち考えながら唱えるというのは、すすめられる唱え方ではありません。これらの祈りは、ちょうどテレビドラマのバックに流れる音楽のように、イエスさまの生涯の各場面の黙想を背後から支えるものなのです。口に出して、あるいは口に出さなくても、同じ祈りをくり返すことによって、いつしか心も熱してきます。そうすると黙想もまた生きてくるという、絶妙の相乗効果をねらった祈りなのです。

最後に、長崎の最も印象的な一本のロザリオをご紹介しましょう。それは、五十八年前の原子爆弾による焼け野原に残された、永井隆夫人のロザリオです。

「八月八日の朝、妻はいつものように、にこにこ笑いながら私の出勤を見送った。少し歩いてから私は弁当を忘れたのに気がついて、家へ引返した。そして思いがけなくも、玄関に泣き伏している妻をみたのであった。

それが別れだった。その夜は防空当番で教室に泊まった。あくる日、9日。原子爆弾は私たちの上で破裂した。私は傷ついた。ちらつと妻の顔がちらついた。私らは患者の救護に忙しかった。五時間ののち、私は出血のため畑にたおれた。そのとき妻の死を直覚した。というのは、妻がついに私の前に現れなかったからである。私の家から大学まで一キロだから、這うて来ても五時間かかればとどく。たとい深傷を負うていても、生命のある限りは這うてでも必ず私の安否をたずねて来る女であった。

三日目。学生の死傷者の処置も一応ついたので、夕方私は家へ帰った。ただ一面の焼灰だった。私は直ぐに見つけた。台所のあとに黒い塊を。—それは、焼け尽くして焼け残った骨盤と腰椎であった。傍に十字架のついたロザリオの鎖が残っていた。」

（永井隆著「ロザリオの鎖」より）

前号の本欄で、今年三月『同和対策事業特別措置法』が廃止されました」と記していましたが、「措置法に関連の事業は終了しました」の誤りでした。説明不十分のため、ここにお詫びして訂正いたします。

以下に示す祈りの中から適当なものを選んで祈るようにしてもかまいません。

第1段階（始めの祈り）
―主をお招きする―

・「つねに私たちと共に歩いてくださる主よ、あなたは落ち込んでいる弟子たちをエマオへの道の途中で励まし、一緒に食事をしてくださいました。いま、私たちのこの集いにおいでくださり、み言葉をとおして私たちを力づけください。アーメン。」

・「私たちの日常生活や人類の歴史を導いてくださる主よ、あなたは紅海を前にしたイスラエルの民に神がなさったように、私たちが行き詰まったときには、いつも私たちの前に道を開いてくださいます。いま私たちのところにおいでになり、方向が定まらない私たちの目を開き、歩むべき道をお示しください。アーメン。」

・「私たちと共に食事をし、共に語り合いたいと望んでおられる主よ、私たちも、そうしていただきたいと心から望んでいます。これから私たちが、あなたに心を開き、み言葉に耳を傾け、その尽きることのないいのちの糧に養われて生き続けることができるよう、私たちのこの集いの中においでください。アーメン。」

・「主よ、あなたはザアカイにあなたを見たいという強い望みを起こさせ、彼の家に泊まることによって、その望みをかなえてくださいました。私たちもまた、あなたを待ち焦がれています。私たちもこの集いにあなたをお招きいたしますので、どうか今日一日、私たちと共にお留まりください。アーメン。」

・「主よ、あなたはいつも私たちの前を歩み、私たちをより広い世界へと連れ出してくださいます。今日も私たちを先導し、あなたと共に歩ませてください。アーメン。」

第7段階（終わりの祈り）
―主に感謝を捧げる―

・「主よ、あなたが今日の集いで私たちと共にとどまり、私たちに新しいみ言葉をお聞かせくださったことを、心から感謝いたします。そのみ言葉を、私たちがこれからの日々の生活の中で味わい、深めていくことができる恵みもお与えください。アーメン。」

・「主よ、今日のあなたのおことばを耳にして、私の心は喜びに満ちあふれています。どうか、この喜びを回りの人たちにも伝え続けることができますように。アーメン。」

・今後の日常生活の上に神の恵みを願う「共同祈願」などを捧げることもできる。

このシリーズでご紹介してきた「み言葉の分かち合い」の方法は「七段階（セブン・ステップ）法」だけですが、それ以外にもいろいろな方法があるようです。また、聖書に親しむ方法には、「み言葉の分かち合い」以外にも、聖書講座、聖書研究会、聖書通読マラソン、聖書百週間、聖書深読法などがあります。

それぞれに特徴がありますが、「七段階法」は聖書のみ言葉が自分の心にいかに響いたかをみんなと一緒に分かち合うやり方ですので、誰にでもやれるものです。まずこの方法から始めることをお勧めいたします。

5．これからの地区集会のために

これまで五回にわたって考えてきたことを参考にしながら、「み言葉の分かち合い」を通してそれぞれの地区（班）集会を活性化させるならば、小教区共同体全体も生き生きしたものに生まれ変わっていくに違いありません。

あるいは、まず、小教区評議会などのような、小教区内のいろいろな会議で行われる「始めの祈り」や「終わりの祈り」にこのやり方を取り入れ、それに慣れてきたところで、少しずつ地区集会にも取り入れていく、という方法も効果があるかもしれません。

次回からは、「福音宣教する長崎教区」づくりのための、**私たちがめざすべき教会像**、について考えていきたいと思います。

ー21、エフェソ6・1ー4、Ⅰテモテ3・4ー5などを参照）存在である。信仰生活に関しても無論そうで、幼児は受洗後能力的に発達するに応じて教会の中により深く組み込まれていき、信仰者として洗礼の恵みにふさわしい応答ができるようになっていくことが希望されている。

d　大人の罪の犠牲になる危険

幼児が弱者であるため大人の罪の被害者にされる危険が非常に大きいことも、カトリックの信仰の立場からは無視できない重大な問題である。

わが国にも子どもの権利と福祉を守ろうと誓った児童憲章（昭和26年制定）はあるが、国民の遵守への熱意はそれほど高くない。最近、親による子ども虐待が話題になっているが、今始まった話ではなかろう。自分の野心を満たすための手段として、自己中心に幼児を育てる親も多い。

人類の歴史を見ると、無数の子どもが戦争、貧困、病気、遺棄の犠牲になってきているが、事情は今も変わらない。近年における生殖補助医療の盛隆の中にも、大人が自由にデザインして製品としての子どもを得ようと熱中する「子作り」、という子どもの人格支配の罪が見え隠れしている。昔から幼児売買は多いが、最近は移植臓器として販売するために幼児の臓器を狙うブローカーもいるらしい。

カトリック教会は、あらゆる不正な幼児支配を神に敵対する重大な罪と考え、その防止に力を尽くそう、と信者だけでなく世界中のすべての善意の人々に呼びかけるのである。

Ⅱ　現在が　人間の理想状態

第二の面は、幼児は現在の状態そのものにおいて、神の前には最高段階の人間であるということである。今後の発育とか発展とか将来性などとは無関係に、現状自体が大きな価値をもっているとされる。これは、イエスの教えに基礎を置く、キリスト教固有の理解である。

a　幼児はキリスト信者の正しい在り方の手本

「神の国はこのような者たちのもの・・・幼子のように神の国を受け入れる者でなければ決してそこに入ることはできない」（マルコ10・14ー15）、「こころを入れ替えて幼子のようにならなければ、天の国には入れない。この幼子のようになる者が、天の国で一番偉い」（マタイ18・3ー4）、などのイエスの言葉がこれを教えている。

われわれは幼児を養育するとき、こちらを完全に信頼しきっている幼児の姿に接する。幼児は無防備であり、完全にこちらに依存している。何かを提供してくれるこちらを自然に受け入れ、こちらに対してこころを開いている。これはまさに神を全幅的に信頼しより頼む者のあるべき姿である。人は自らは何ももたず、自分を支えてくれる神の恵みによって初めて生きることのできる存在である。全てにおいて神を信頼してより頼むべきわれわれにとって、幼児は手本として与えられているものである。キリスト信者には、「幼児のように神にこころを開き続ける」徹底した信頼的態度が理想とされる。このような者こそ、神を真に知る者である。神は、知恵ある者には隠したものを幼い者に啓示される（マタイ11・25）。

b　現状そのままで神に愛された価値ある存在

イエスによって身近に招かれ、抱きしめられ、祝福されるのが幼児である。「幼子たちがわたしの許に来るのを止めてはならない」と言われたイエスは、「幼子たちを抱き、かれらの上に両手を置いて祝福された」（マルコ10・16）。

カトリック哲学は、このイエスの教えを基にして、さらに、幼児には神が万人に等しく与えている霊魂があり、人格の尊厳がある、と理解してきた。

幼児はそれ自体で、すなわち現状のままで、本質的に不可侵の尊厳をもっている。将来一人前になるからとか、成長して立派な人間にならねばならぬとか、どのような可能性や能力をもつかとか、どの発達段階にあるかとか、障害のありなしや遺伝的資質や健康状態がどうか、などとは関係なく、それ自体で本質的に価値がある、というのである。この考え方はそのまま胎児の問題や障害者の問題などにも適用され、カトリック倫理の基本原則とされる。

「子どものテレビ漬け」

文部科学省は、小中学生の基本的学力の低下が際立つと発表したが、実は、半世紀も前、大宅壮一氏は、「テレビによって国民が一億総白痴化する」と、今日の学力低下を予言していた。そして今、週刊誌ＡＥＲＡ（アエラ）は、「キレる子どもの増加など説明のつかない子どもの変化がテレビ漬けの生活と関係ありそうだ」と、実例をあげて警告している。

「２歳半のＡくんは１歳当時、“何歳？”と聞くと、“いっさい”と答え、１０ほどの単語も話していた。その後、母親が職場復帰し、祖母に預けられた半年で、Ａくんから言葉が消えた。返事もしなければ家族と目も合わせない。度々、ひっくり返って暴れる。半年間で何があったのか。テレビを見る時間が増え、アンパンマンのビデオにはまり、１日に７～８時間も見るようになっていた。」

また、「２歳のＢ子ちゃんは保健婦から、１歳程度の能力しかないと指摘された。叱っても知らん顔だし、指さしもしない。１歳頃から、母親は幼児英語教育のビデオを家で流しっ放しで、Ｂ子ちゃんは１日５時間以上も見入っていた。Ｂ子ちゃんは決して知的障害があったわけではない。テレビやビデオを全然見せなくなったら、１か月でニコッとするようになり、３か月後には“ちょーだい”“ありがとう”などの言葉も出るようになった。」

子どものテレビ漬けには漠然とした不安はあったが、具体的な実例を突き付けられると、不安は現実的な恐怖となって迫ってくる。

次の文は、週に１日だけを“テレビ無しの日”にした子どもと親たちの感想である。

「長男は父親が昔よく聞いていた歌のカセットを聞き始めました。妹たちも来て、“父さんのカセット、ちょっと変…”とか言って笑い転げていました。幼い頃の思い出話に花が咲きました。」（母Ａ）

「夕食準備時も静かで、父子の会話が耳に飛び込んでくる。図鑑を見て父子でＱ＆Ａをやっている。私が９時にお風呂に入るなんて考えられなかった。時計の音さえ響いている。“へぇー、こんな音で鳴っていたんだ！知らなかったねぇ”と笑う。」（母Ｂ）

「テレビを消すと、風で戸がガタガタ鳴っていて、ぞくぞくしました。時計の音や風の音、こんな小さな音まで聞こえて、まるでミクロの世界に入ったみたいでした。」（Ｃ男）

「はじめは“ギャー、ギャー”言ってた妹も慣れたのか、音楽や本で楽しんでいる。僕も時間によゆうができた。前はイヤイヤ消していたのに、何か楽しいことをするような気持ちだった。」（Ｄ男）

「テレビを消して一番良かったのは、何より、ご飯がおいしく感じたことです。いつもはテレビを見るので、“口に入れる”という感じでしたが、その日は、“食べる”という感じでした。先生が言うように、テレビができて失ってしまったものもあるのかもしれない。」（Ｅ女）

初めて体験した“テレビ無しの日”で親子が得たものは、「ゆったりした時間の流れ、静寂というふしぎな宝物、楽しい食卓、そして、何より貴重な家族の対話や温もり、安心しきった子どもたちの笑顔。どれも、テレビでは得られない家庭の幸せ」だと親たちは言う。言い換えれば、私たちは、これらの家庭の安らぎや温もりというあたり前の幸せを、テレビによって奪われているということである。

もちろん、テレビの効果は無視できないし、テレビに罪はない。問題は、親たちが“テレビ漬け”からわが子をどう守るか、である。今の親たち自身がテレビにお守りされて育った手前、その恩義を捨てて、“テレビ離れ”を口にできるかという心配はあるが、“テレビ無しの日”が家庭に週１日でもできれば、子どもたちにとっては万々歳である。

すべてはここから始まるのだが、今は、テレビを裏切る親たちの勇気を期待するしかあるまい。

（にしむら　よしを）

よりよい聖書朗読をめざして

私たちは、ミサの中で、神の呼びかけとして伝わるような聖書朗読、またそれを聞く人に感動を与える朗読をしたいと心がけてはいますが、時に準備不足のこともあります。

そこで、長崎市内のある小教区報が、昨年の復活祭の前に「紙上聖書朗読講習会」なるものを企画・掲載していますので、ご紹介させていただきます。

解答者は、城山教会の信徒でフリー・アナウンサーの、東島真奈美さんです。

朗読のポイントは？・・・

① 日頃から、自然に話しても聞き手に届くような（4～5m離れた人に話しかける気持ちでやや大きめの）声が出せるように心がけます。

② 聖書の「文字」を読むのではなく、「言葉」を読むという意識を持ちます。

③ まずはじめに、熟読して、分からない読み方や意味などがあれば、（聖書辞典を利用したりして）調べます。

④ 意図が分かったなら、話しかけるような気持ちで自然に声を出し、人に届くくらいの声で練習します。

⑤ 本番では、言葉を大切にし、誠実に読むならば、聞き手の心にはかならず届くはずです。

声を鍛える方法は？・・・

声を鍛えるためには、4つのポイントを重視すべきです。

① **腹から声を出す**
合唱の練習と同じように、腹式呼吸をします。

② **口の開け方に注意する**
特にア・イ・ウ・エ・オの母音の口の形が基本となります。これがしっかりできると、すべての言葉（発声）が明瞭になります。

③ **正しい姿勢をとる**
背筋を伸ばすと、声の響きが違ってきます。目線が下がると、声のトーン（調子）は暗くなり、上がると、声のトーンは明るくなります。

④ **耳を鍛える**
日頃から、言葉や話し方に関心を持つように心がけます。人の話を聞くときも、聞き手側の自分はそれをどう感じるか、という点に気を配りながら聞くようにします。心がけさえあれば、私たちの回りにはたくさんの学ぶ「場」があります。

マイクの使い方は？・・・

マイクは口元の高さに合わせ、その間隔は10～15cmくらいがよいでしょう。天井の高い聖堂では、通常のスピードよりゆっくりと、かみしめるように読むのがよいでしょう。

長崎地区信徒使徒職評議会では、来る2月16日・3月23日に「朗読奉仕者の講習会」を予定している。プロのアナウンサーなどの指導で、発音・発声の基本を学び、朗読の実習を行う。

小教区単位の指導についても、都合のつく限り要請に応じていただける、とのこと。

朗読講習会の一場面